

# 江戸時代前期における岩佐又兵衛の

## 源氏物語絵制作に見る創意に関する再検討のための基礎研究

大阪芸術大学 美術学科 教授 河田昌之

江戸時代前期の物語絵制作において、際立った特徴を持った作品を残している絵師の一人が岩佐又兵衛（1578～1650）である。又兵衛による独自形式の作品や又兵衛の来歴などに対してはすでに先行研究があり、その成果によって岩佐派の頭領で、特異な感性を持った絵師像が明らかにされてきた。

本研究は、それらを受けて、又兵衛の作品のうちで未整理なジャンルとして残る屏風絵形式の源氏物語絵（源氏絵）を取り上げる。又兵衛の感性と絵画学習によって構築された創意のあり方に注目して、屏風絵形式の源氏絵を再考察し、江戸時代の源氏絵に関する受容史を総体的に構築する上での基礎的な研究に発展させることを目的とする。

江戸時代前期における源氏絵の制作は、伝統的なやまと絵の技法や画題を継承する土佐派の頭領の光吉（1539～1613）が中心になって取りまとめた章段の画面構図やモチーフ構成を基盤として生み出された色紙、扇面、屏風形式が主流であった。狩野派の絵師も土佐派に追従するように源氏絵を制作した。土佐や狩野以外の絵師で注目されるのが絵屋の筆頭である俵屋宗達（16世紀後半～17世紀中頃）の活躍である。宗達と門人による源氏絵としては、団家旧蔵、および藤井家旧蔵の屏風絵の断簡や扇面画や色紙絵を貼り交ぜた屏風などが残されている。そこに描かれた人物は個性的な姿ではなく、感情を露わにしない穏やかな相貌で、おおらかで優しげなイメージを持っている。宗達は公家や豪商との間にも人脈があり、こうした制作環境が宗達の物語絵制作において先に述べた独自の造形を生む上で影響があったと考えられる。

本研究の対象となる岩佐又兵衛は宗達の活躍時期と重なるもう一人の重要な絵師である。又兵衛の諱は勝以（かつもち）で、出自は武士である。絵師として活躍することになった又兵衛は、福井城下や京都、江戸にも制作の場を得て、やがて幕府の絵画制作を行うまでになる。又兵衛の画風は、土佐派や狩野派とは表現の性格を異にし、洛中洛外図屏風（東京国立博物館蔵）などに代表される風俗的な要素を多分に持っており、人物描写や画面構成がきわめて特徴的である。又兵衛作品においては、まず風俗画からの研究が早くにあり、その成果が現在にも敷衍している。一方、他の又兵衛作品として屏風絵形式の源氏絵があるが、それらは未だ研究途上にある。

申請者はこれまで土佐派、宗達と門人たちを中心にした源氏絵研究を行い、その成果の一端を展覧会や展覧会図録を通して開示してきた。その過程で狩野派の源氏絵も比較研究の対象とした。研究課題として上げた又兵衛の屏風絵形式の源氏絵は、こうした研究経過のなかに位置付けられる。

又兵衛の源氏物語図屏風は、作風に幅があり又兵衛単独で描いたとは断定できないため、本研究では限定された期間内のなかでの調査可能な範囲に絞り、伝承

作品を含めて先行研究を参考にして次の作品を選んだ（注1）。

- 1 源氏物語図屏風「岩佐勝友」落款、判読不明印  
60場面 6曲1双 出光美術館
- 2 源氏物語図屏風6場面 6曲1双 大和文華館
- 3 源氏物語図屏風20場面 6曲1双 京都国立博物館
- 4 源氏物語図屏風6場面 6曲1双 高津古文化会館
- 5 源氏物語図屏風6場面 6曲1双 石川県立美術館
- 6 源氏物語図屏風12場面 6曲1双 高津古文化会館
- 7 源氏物語図屏風6場面 6曲1双 大徳寺 真珠庵
- 8 源氏物語図屏風12場面 6曲1双 泉屋博古館
- 9 源氏物語図屏風12場面 6曲1双 東京富士美術館
- 10 源氏物語図屏風12場面 6曲1双 東京富士美術館

又兵衛の源氏物語図屏風に見られる創意について検討するため、これらの作品を通して構図、描写を中心に考察を進めた。

このうち7の大徳寺 真珠庵本は長く京都国立博物館に寄託されていたが、2025年のNHK大河ドラマの影響もあり、紫式部と源氏物語や王朝文化、それらに関連する美術作品の掘り起こしを促したことで、真珠庵で時期を限って公開された。この機会に作品調査が許可されて、複数の研究者とともに熟覧した。この調査によって、7大徳寺 真珠庵本は、4高津古文化本、5石川県立美術館本、8泉屋博古館本に施された金雲がいずれも胡粉盛り上げの装飾が丁寧な金雲である点と、左右隻の金雲による画面区画ともにほぼ共通していることがわかった。また章段の選択は「紅葉賀」「絵合」「胡蝶」が共通していることも確かめられた。これらの4点は6曲1双屏風を6場面構成している点でも共通しており、画面区画と描かれる章段に制作の規範があることが予想できる。これは調査の成果の一例であるが、人物表現に特徴を持つ又兵衛の画風に注目されがちであるなかで、屏風の画面区画からのアプローチによって屏風絵の制作過程に立ち返って作品研究を行うことで、又兵衛の門人たちを含めた又兵衛工房の源氏物語図屏風における創意のあり方を捉える視点が増えた。

今後は、又兵衛の源氏物語図屏風は作品の全体像が未だ定かにされていない現状にあるなかで、既存の作品を整理し制作上での創意の考察を続け、又兵衛の作品研究を補足し進展させることにつなげることで、そして引き続き、又兵衛の源氏絵を取り込んだ江戸時代の源氏絵の受容史の総体的な構築への基礎的な研究に発展させることが課題である。

（注1）雨宮六途子「源氏物語図屏風と岩佐派の絵師」『聚美』10号 2014年。廣海伸彦「誰も見たことのない源氏絵を又兵衛はいかにして描いたか」特別展「岩佐又兵衛と源氏絵」出光美術館 2017年